

# 疏通千里利澤萬世



## 疏通千里・利澤萬世

Meiji-Yousui Rural Resources for Future Generations

— 生命を育む明治用水 —



# 安城が原の苦難

## — 荒寥たる草野

### 農業と工業の王国

### 愛

知県といえは、全国に名だたる工業王国とのイメージを持つ人は少なくない。平成二十年の工業出荷額（製造品出荷額等）は、二位の神奈川県約二・四倍とダントツの一位の座に輝いている。しかし、愛知県が同時に全国屈指の農業地帯であるということをご存知の方はどれだけいるだろうか。農業産出額は全国で六位（平成二十年）。農業も工業もトップクラス。このような地域は、他にはない。

そんな愛知県のほぼ中央を矢作川は流れる。周辺には、整然とした農地が広がり、豊かな農村地帯の印象を与える。この地はまた、世界的に有名な自動車メーカーの本拠地とも接しており、工場や住宅の進出も著しい。農業と工業、一見すると、対立するかのように見える二つの産業の繁栄を支えているのが明治用水である。

現在の、ほとんどがパイプライン化されているため、その流れを見ることはできない。しかし、私たちの皮膚の下を血管が巡り、余すところなく血液を届けるように、この地もまた明治用水という目には見えないラインで活かされている。



大半は山村の如く、  
荒寥たる草野は、  
鬱蒼たる小松原と相交り、  
徒らに狐狸の跋扈に委し、  
其の間に僅々一二段の田圃を拓き、  
禾穀を栽培したるに過ぎず

— 『弥厚翁』より



【明治用水開削前のため池分布図】  
網掛け部分がため池。明治用水開削以前の碧海台地が、ため池密集地帯であったことがよく分かる。

### 荒寥たる草野

### 現

在、明治用水開削以前の様子を想像することができる



はねつるべによる取水。  
汲み上げた水を田にかけていた。

者は、そうはいないだろう。広大な台地が広がるこの地は、かつて「安城が原」「五ヶ野が原」と呼ばれるやせ地であった。

現在の私たちは「野原」と一般に言うが、古い日本語では、「野」と「原」の意味は違う。「野」が単なる未墾地を指すのに対して、「原」は水が乏しく、農業もできない台地のことを指していた。かつてのこの地には狐しかすまないと いわれるような荒寥たる草野が広がっていたのである。

わずかに台地の切れ目を流れる小河川沿いに小規模な水田が開発されていたが、いかにせん水に恵まれないこの地の農業は苦しかった。そのため、早くから、あちこちでため池が開発され、ついにはため池の延べ面積は四八八町歩となる。一町歩以上もある大きなため池は八四か所にも及び、台地上



の耕地の半分以上がこれらのため池に依存していたという。

しかし、それでも水は足りず、農民たちは「はねつるべ」や「ふみぐるま」を用い、懸命に水を引いた。少ない水をめぐって、農民同士で争いが起こることもしばしばであった。

— そうまでして

も、収穫はわずかで、農民の暮らし向きは、麦・粟・稗・黍などを主食にする貧しいものであったという。

朝早くから夜遅くまで過酷な労働に追われる様は「あの子どこの子 安城の子家のとうさ（お父さん）の顔知らぬ」と歌に詠まれるほどであった。

江戸時代を通じて、この地は、もっぱら



愛知県三河地方の地形。安城市が台地上に位置していることが分かる。（出典：愛知県「県土レポートあいち'99」一部加筆修正）

ふみぐるまによる取水



ともかくも、明治用水開削以前の碧海台地には、豊穡な田圃にたわなに実る稲の収穫など望むべくもなかったのである。

焚き木や下草の肥料を求め「入会地」として利用されている。化学肥料や石油燃料がない当時、この地の雑木林がもたらしてくれる自然の恵みこそが、なによりも貴重な資源だった。裏を返せば、それ以外に使用し得ない土地が大半だったともいえる。

# 世紀の大用水

## 明治用水の完成

「一朝にして十萬石以上の大名の土地の所有に等しき利益を得る」

明治十三年四月十八日、

時の内務卿 松方正義は、

明治用水の完工を称賛した。



伊豫田与八郎像 (豊田市歌部西町)

都築弥厚像 (安城市和泉町)

石川喜平像 (安城市高棚町)

岡本兵松像 (安城市石井町)



石川喜平のそろばん (上)、測量に使用した見盤 (中)、測量に使用した算木 (下)



明治用水旧頭首工 (明治42年完成)の絵図

## 都築弥厚の用水計画

の荒寥たる草野に、用水開削が計画されたのは、江戸末期のことである。和泉村（現在の安城市和泉町）の豪農 都築弥厚は、矢作川上流の越戸村（現在の豊田市）から水を引き、延々三〇kmにも及ぶ水路によって台地を潤す大用水の開削を計画する。事業成功によって見込まれる新田開発面積は四、二〇〇町歩、収穫は五万石と、現代の農業水利事業にも引けをとらない大事業であった。

しかし、当然のことながら、この壮大なプランを実現するのは並大抵のことではなかった。

隣の高棚村（現在の安城市高棚町）の数学者 石川喜平の協力を得て、直ちに測量が始められたが、作業は困難を極める。何より障害となつたのは、地元農民の妨害であった。水害の発生や「入会地」の減少を恐れた農民たちは、時に暴徒化して竹やりを持ち襲いくるほどで、作業は人目を避け、夜間密かに行われた。提灯や火縄のわずかな明かりを



都築弥厚開削願書写し

頼りに作業を進めるも、目印に杭でも打とうものなら気付かれて抜かれてしまう。綿や蕎麦の種子を蒔き、発芽した場所を目印にしたという。まさに命がけの測量、その熱意たるや想像を絶するものであったに違いない。

それでも、五年もの歳月をかけた測量図が完成、一八三三（天保四）年には、幕府から一部開発の許可も下りている。しかし、同年、弥厚は、長年の激務がたたったのか、病没してしまふ。享年六九歳、莫大な財産は全て失い、借財は二万五千両、現在もかさんでいたという。彼の死とともに、計画は挫折した。

## 悲願の開削工事

代は明治へと移り、石井新田（現在の安城市石井町）の岡本兵松によって、弥厚の計画は蘇る。しかし、このころ明治維新という時代の激変によって、地

世紀の大用水 — 明治用水の完成



明治用水灌漑地図 (明治30年)

うした開田地から徴収した配水料によって県の調達金を含めた当時の工事費用が賄われた。つまり、民間の着想と資金調達だけでこの歴史的な事業を成し遂げたことになる。この業績は、まさに明治の世に燦然と輝く金字塔といえるだろう。

この時、「工事ができあがれば、恨む村は三か村、喜ぶ村は数十か村、なにほどのこともない。」と強く言い放ったといわれている。

## 明治用水の実現

明治十三年、ついに「明治用水」は完成を見る。三月には「明治本流」が、五月には「中井筋」と「東井筋」が、翌年には「西井筋」が完成した。総延長は五二km、県は引き続き支流約四〇本の開削を続け、明治十八年六月にはほぼ現在の明治用水の姿となった。用水が開削されるにつれて、不毛の土地として見放されてきた台地面は、次々と水田として開墾されていった。明治用水の場合、こ



疏通千里・利澤萬世 — 生命を育む明治用水

Meiji-Yousui Rural Resources for Future Generations

## 日本デンマークの実現

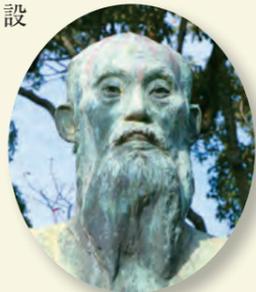
### 明

治用水完成後の農業の発展は目ざましかった。約二、三〇〇haだった水田面積は、明治十六年には、倍の約四、三〇〇haとなった。以後、毎年一五〇haほどずつ増え続け、明治四十年には、八、〇〇〇haを超す一大穀倉地帯へと画期的な転身を遂げた。

地域の発展はこれに留まるものではなかった。台地という立地条件のため、秋になり、明治用水の水門が閉ざされると、水田は全て干しあがって畑となる。これを利用し、冬季には麦や野菜、菜種、れんげなどが栽培され、耕地の高度利用が図られた。昭和六年の碧

海郡農作物産額が示しているところ、生産物は米作を中心に養蚕、養蚕、蔬菜、果樹と多方面に渡り、このような農業のあり方は多角形農業と呼ばれ普及していった。

特に、その推進に大きく貢献したのが山崎延吉である。山崎は、明治三十四年に新設



山崎延吉像 (安城農林高等学校正門前)

された安城農林学校(現県立安城農林高等学校)で、設立以来二十一年間校長を務め、農民たちが学問としてではなく、実地に役立つ技術を学ぶことを目標に尽力した。農村を歩き回っては農事の改良と農民の教育にあたり、農林学校の卒業生たちとともに産業組合を組織し、農作物の共同出荷を行った。「安城梨」「三河スイカ」など農産物のブランド化にもいち早く着手

している。こうした成果が現れ、この地の農業は急速な発展を果したのである。最盛期には、農業関係の視察者が次々と訪れ、駅前には旅館、食堂、演芸場、映画館などがズラリと立ち並んだという。

# 日本デンマーク

## — 碧海台地の躍進

### 開拓の苦難

て、「日本デンマーク」の繁栄とともに、その開拓の苦難にもここでは触れておかない。この地の農業の歴史は浅い。水が届くようになったとはいえ、もともとは原野。重い黒鍬を振り上げては打ち下ろし、農民たちは朝から晩まで、無限とも思えるほど長い時間を費やし開墾にあたった。特にため池の開墾に至っては、その苦労は想像に難くない。また、農業というのは、原野を切り開いたからといって、すぐに思うような収穫がえられるものでもない。実り豊かな収穫のため、親子何代にもわたって、土を肥やし、土壌を改良した。「嫁にやるな

### 明治用水の通水により、

不毛の土地として見放されていた台地は、

次々と沃野へと変貌していった。

ついに「日本デンマーク」と呼ばれる

優良農業地帯へと発展を遂げたのである。

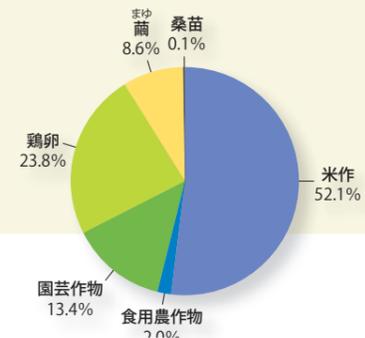
ら安城にやるな。年がら年中野良仕事」。開拓時代の安城には、こんな歌すら残っている。

不利な条件への粘り強い挑戦、改良や工夫、こうした開拓の労苦を経て養われた気風こそが、日本のモデル農村として教科書で取り上げられるほどの繁栄を下支えたことは疑いようもない。

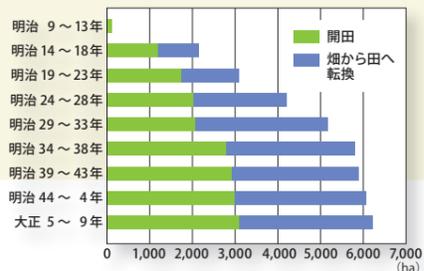
日本デンマーク — 碧海台地の躍進



昭和26年の風景(明治用水管内)。祭りと思われるが、日本デンマーク時代のにぎわいを感じさせる。



碧海郡農作物産額の作物別割合 昭和6年 青木一己「碧海郡の農業と産業組合」より作成



明治用水地域の水田増加の状況 (地価修正事業誌より)



日本デンマーク — 碧海台地の躍進

## 明治用水の変遷と 新たな課題

こ ここでは、幾多の変遷を遂げた明治用水の歩みを辿ってみたい。

開削当時、矢作川に設けられたのは丸太で杭を打ち、割石を積み上げた導水堤だけだったが、漏水が多く、破損を繰り返していた。そのため、明治三十四年から、当時の最新技術を導入し、堰堤の築造が行われた。工事を請負ったのは碧海郡新川町（現碧南市西山町）の服部長七。彼の発明した人造石（タタキ）を使ってつくられた堰堤は、舟運業も考慮に入れ、舟通開門なども完備した近代的なものであった。この堰堤は、現在も一部が残っており、その堅固さをうかがうことができる。昭和七年からは県営事業として水路のコンクリート護岸工事などが行われるが、戦時体制の強化や労力、資材不足などの状況が重なり、次第に事業は困難となっていた。

終戦を迎え、差し迫った食糧増産の必要性もあり、ようやく老朽化した水利施設の抜本的な改修が実現する。昭和三十三年には、五年あまりをかけて、現在の頭首工が完成し、同時に用水路、排水路が改修された。しかし、この頃

から、日本の水秩序に、大きな異変をもたらされようとしていた。高度経済成長に伴い、新規の工場が著しく増加。

工場の建設は、周辺の宅地化や団地の形成につながり、人口増加をもたらした。水路には、工業排水や生活排水が流入するようになり、水質が悪化、稲の根腐れなど大きな被害が発生した。

明 治用水では、このような状況に対応するため、昭和四十五年か

ら水路の管水路化を実施している。頭首工から下流部へは、落差を利用した自然圧によって水が送られ、水源管理所に設置された遠方監視制御施設により、水の近代的な管理が可能となった。現在では、用水路約三〇〇kmのうち、約八割の管水路化が実現、管水路化に呼応して、各地のほ場整備事業も行われ、水田の汎用化や大型機械の導入も可能となった。

### 地域発展の礎

一方、都市化に伴い、地域の需要も、農業用水に加え、工業用水、生活用水と急激に増加した。昭和三十五年ごろには、矢作川の自流のみでは到底対処できない状況となり、地域全体の発展を目的とした矢作

川総合開発事業が採択される。昭和四十六年には矢作川上流に新たな水源として、治水、都市用水、発電、農業用水の多目的ダムである矢作ダムが完成した。

昭和五十年からは、明治用水の一部を共用し、西三河工業用水の通水が開始され、明治用水は農業だけでなく、都市の生活を支える新たな「地域の水」として生まれ変わったのである。

急 速な工業化の結果、かつて「日本デンマーク」とも称されたこの地の農家は、ほとんどが兼業化した。だが、管水路化やほ場整備事業の実現によって、新しい効率的な農業経営が可能になった。現在では営農組合による受託農業が盛んに行われ、依然として、農業は基幹産業としてこの地を支え続けている。

パイプライン化され、目には見えな



水源管理所 遠方監視制御施設



明治用水広畔発電所(昭和11~34年に稼働)上流から下流への落差4mを利用した発電所。現在は制水門となっており、この落差4mを活用することで、ここから下流の管水路方式が実現した。



東井筋の今昔。写真右、手前の道路下(地中)にかつての用水路が管水路化されて通っている。



明治用水の変遷 — その恩恵は地域全体へ



明治用水旧頭首工(明治42年完成)



今も残る旧頭首工跡。服部長七が発明した人造石が用いられている。

# 明治用水の変遷

— その恩恵は地域全体へ —

水は、農業のみならず

あらゆる産業の源である。

幾多の変遷を経て

明治用水は都市用水の供給をも支える

地域発展の礎となったのである。

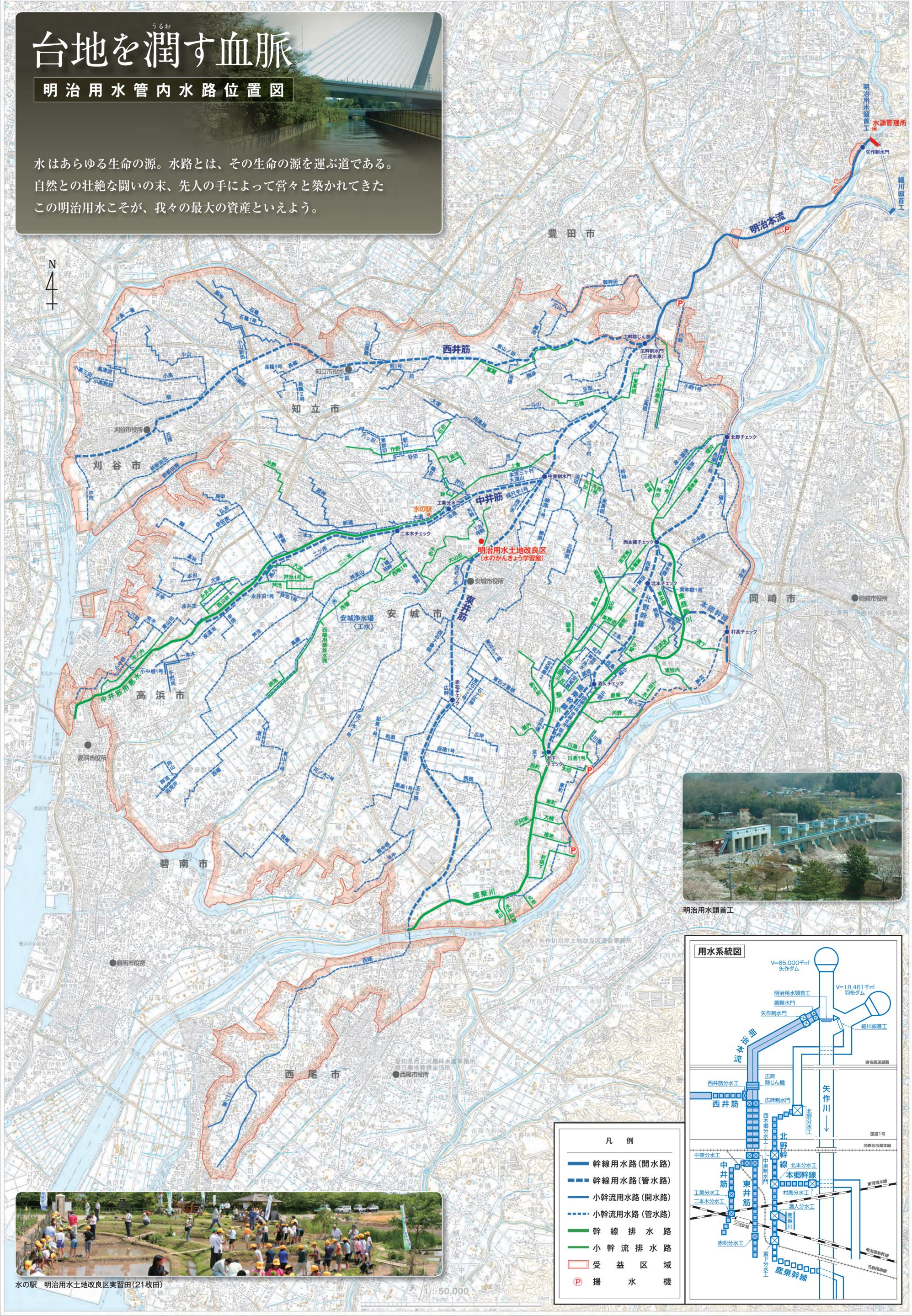
現在の明治用水頭首工(昭和33年完成)



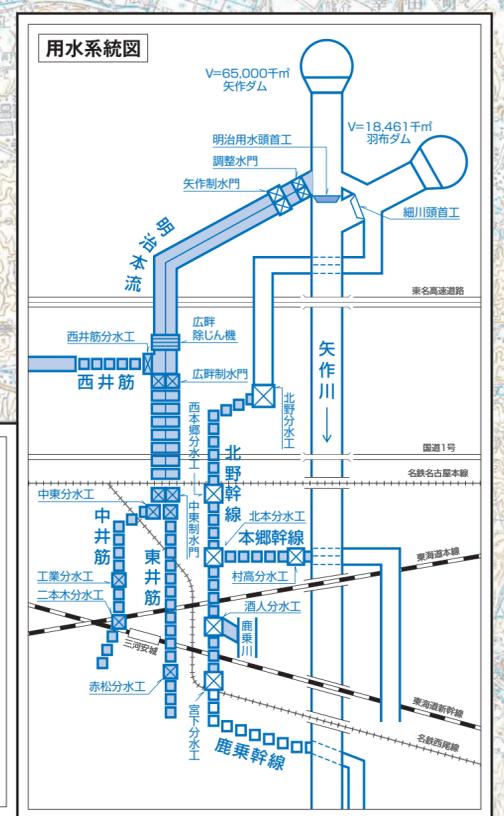
# 台地を潤す血脈

## 明治用水管内水路位置図

水はあらゆる生命の源。水路とは、その生命の源を運ぶ道である。自然との壮絶な闘いの末、先人の手によって営々と築かれてきたこの明治用水こそが、我々の最大の資産といえよう。



明治用水頭首工



- 凡例
- 幹線用水路(開水路)
  - - - 幹線用水路(管水路)
  - 小幹流用水路(開水路)
  - - - 小幹流用水路(管水路)
  - 幹線排水路
  - 小幹流排水路
  - 受益区域
  - Ⓟ 揚水機



水の駅 明治用水土地改良区実習田(21枚田)

1:50,000

この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図を複製したものである。(承認番号 平21業複、第987号) この地図を複製する場合には、国土地理院の長の承認を得なければならない。



# 水を使う者は 自ら水をつくれ

— 矢作川水源かん養林の経営

地域の生命の源である矢作川。我々は、その恩恵にあずかるだけでなく上流、とりわけ水源地にも目を向けるべきではなからうか。明治用水では、水源かん養林の経営や流域一体となった水質保全の取り組みに力を注いでいる。



かん養林の名称	場所/面積 (ha)	備考
根羽 (ねば)	長野県下伊那郡根羽村 427.33ha	1914(大正3)年11月より
平谷 (ひらや)	長野県下伊那郡平谷村 36.12ha	1987(昭和62)年3月より
羽布 (はぶ)	豊田市羽布町 54.89ha	1908(明治41)年より
有間 (あま)	豊田市有間町 2.88ha	1930(昭和5)年8月より
小渡 (おど)	豊田市小渡町 3.46ha	1926(大正15)年4月より 1960(昭和35)年4月より 1984(昭和59)年11月より
合計	524.68ha (ナゴヤドーム約120個分の面積)	

木の一生	維持管理作業	
0年	地拵(じごしらえ)	3,000本
8年	植林(しょくりん)	
11年	下刈(したがり)	2,300本
15年	除伐(じよばつ)	
22年	間伐(かんばつ)	1,100本
32年	間伐(かんばつ)	
45年	間伐(かんばつ)	750本
55年	間伐(かんばつ)	
88年	主伐(しよばつ)	330本

## 水源かん養林

台 地という立地条件での苦渋をいやというほど味わった

歴史的経緯からであろうか、明治用水土地改良区の水への想いは深い。

早くから治山と治水は一体であるという考えに立ち、用水完成後、間もない明治二十二年には、すでに矢作川流域の官林八四〇haの払い下げに反対し、これを中止させている。

明治三十九年には、用水管理組合によって森林経営が議決され、候補地を物色。明治四十一年に、



水源かん養林として上流の山への造林事業を始めている。決して経済的に余裕があったわけではない。しかし、上流の山林こそが、明治用水にとっての生命線、その想いは強く、現在では長野県を中心に合計、約五二五haもの水源かん養林を所有し、管理を行っている。

平成二十年度からは、水源地と農業の関わりについて啓発する農業用水源地域保全対策事業を実施し、森林整備の大切さや森林が果たす役割など、小学生を中心とした流域住民への啓発活動を展開している。

水を使う者は自ら水をつくれ — 矢作川水源かん養林の経営



ワシを上流山村に直送して朝市を行ったりと、上下流の住民の交流も盛んに行われている。

こうした矢作川における民間主導の水質保全の活動は、広く知られることとなり「矢作川方式」と呼ばれている。現在では、矢水協の加入団体も流域四〇団体となり、流域全体が協力して矢作川の清流を守っている。



明治用水土地改良区が管理する水源かん養林の位置

## 流域はひとつ 運命共同体

### 流域単位での水資源確保の

取り組みはそれだけではない。都市化と水質汚染が顕在化してきた昭和四十年代には、土地改良区自ら水質分析室を設置し、工場・事業所の水質



また、「流域はひとつ運命共同体」を合言葉に、最上流の山村の子どもたちを潮干狩りに招いたり、三河湾で捕れた新鮮なイ



(上) 矢水協による愛知県庁への陳情 (昭和46年)  
(下) 工場排水の独自調査。水質汚染の状況がよく分かる (昭和49年)



## 守り継ぐ想い

**明** 治用水は、民間人によって、計画・開削された伝統を引き継ぎ、開削当初から村々による総代を選出して、管理に当たってきた。「土功会」「普通水利組合」そして現在の「土地改良区」と名称は変わっても、水管理の地元組織は、用水の管理という責務を果たし続けている。

しかし、農地や農業人口が著しく減少した現在、土地改良区が従前のおりの役割を果たしていきなのは、並大抵のことではない。土地改良区の活動資金は、受益面積に応じた農家の賦課金に依存しているため、農地の減少が続く限り、財政的な負担は増え続けていく。

また、例え全体の農地面積が減少しようとも土地改良区の果たす役割は減るわけではない。水路だけを例にとっても、土地改良区の管理は約四〇〇kmにも及び、農家以外の住民の協力が必要であるのは明らかだろう。

## 明治用水の多面的機能

**か** つて人々が親しんだ水路は、パイプライン化によって、地下へともぐり、目には見えぬ流れとなった。しかし、水の恩恵への感謝の気持ちを忘れぬため、歴史的な景観を守り継ぐため、土地改良区では、往時の面影を残した環境整備に取り組んでいる。

水路用地の上部は、大部分が自転車道・緑道・歩道・通学道路など有効に活用されており、自転車道や緑道には、せせらぎと呼ばれる水辺が設けられている。各所には、地下に張り巡らされた管水路網を



かつての明治用水本流（明治川神社付近）



# 疏通千里・利澤萬世

— 生命を育む明治用水

「疏通千里・利澤萬世」

苔むした明治用水記念碑に書かれた時の内務卿 松方正義の言葉である。疏通（水路を通す）すること千里、その利澤（恩恵）は萬世におよぶ。先人の血のにじむ努力によって築かれた明治用水は、「万世」に継承すべき、かけがえのない地域資産である。



【明治用水開渠記念碑（安城市浜屋町）】

(右) 疏通千里利澤萬世 内務卿 松方正義  
(左) 聖朝嘉精良民義峯 大蔵卿 佐野常民  
と刻まれている。

利用した親水公園が整備され、地域の景観に潤いをもたらしている。

明治用水が地域に果たす役割は、これだけではない。火災時には、消火栓・防火水槽に代わる防火水源として利用されており、現在、明治用水には、一五四か所に防火水利施設が設けられている。また、明治用水の水によって潤される田畑は、洪水の防止、地下水のかん養、気候の緩和、生態系の保全など、様々な多面的機能を発揮しており、地域にとって必要不可欠な存在となっている。

明治用水土地改良区では、平成二十二年度の通水百三十周年を機に、地域活動の拠点施設である「水のかんきょう学習館」を建設する。今後も、農業と農業施設が発揮す

疏通千里・利澤萬世 — 生命を育む明治用水

## 「神」となった人々

### 水

——その大切さは、今さら述べるまでもないだろう。飲み、煮炊きし、洗い、私たちの生活は、水なしでは成り立たない。また、農業、漁業、水運、発電、工業と、社会とは実に水資源の利用に尽きるともいえる。この地の先人たちは、あらゆる辛苦と闘い、明治用水という一本の道を通した。かけがえのない水の道である。



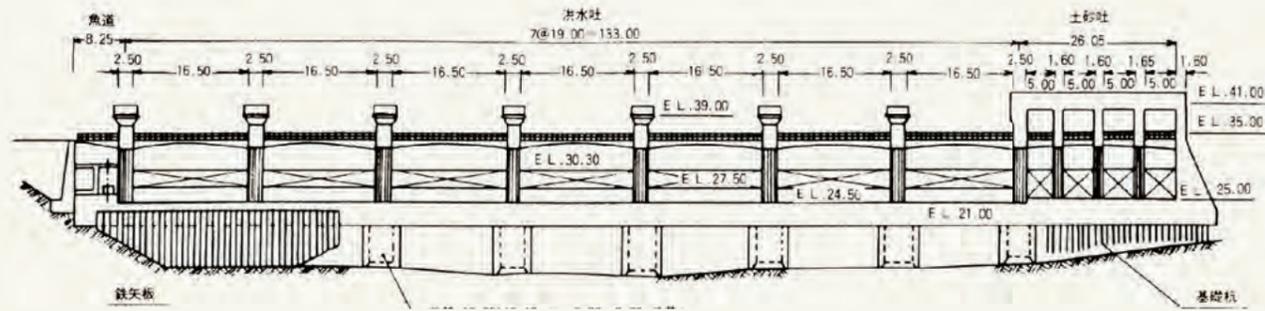
明治川神社（安城市東栄町）

郎ら開削功労者は、「神」として明治川神社に祀られている。また、この地域には、約四〇か所の功労者碑や用水開削碑が残されている。我々は、いうまでもなく、歴史の恩恵の上に生きている。地域にとって、真の資産とは何であろうか。願わくは、この地の先人たちの功績と恩恵に、今一度、想いを馳せていただきたい。

しかし、時代は変わり、「農」の営みは、時として遠くの出来事ととらえられるようになってしまった。水の汚濁にも鈍感になり、急ぎ立てられるように過ぎてゆく日々、その大切さすら忘れかけてしまいがちである。だが、一日たりとも、水がなくて平気な人間はいない。ものを食べぬ人もない。

明治用水が完成したとき、通水に立ち会った農民たちは涙を流して感謝したという。都築弥厚、岡本兵松、伊豫田与八

■標準断面図



■幹線水路及び小幹流水路

幹線水路は、明治本流・東井筋・中井筋・西井筋・鹿乗井筋に大別される。各幹線より分水する小幹流水路と合流する用排水路は、下表のとおりである。

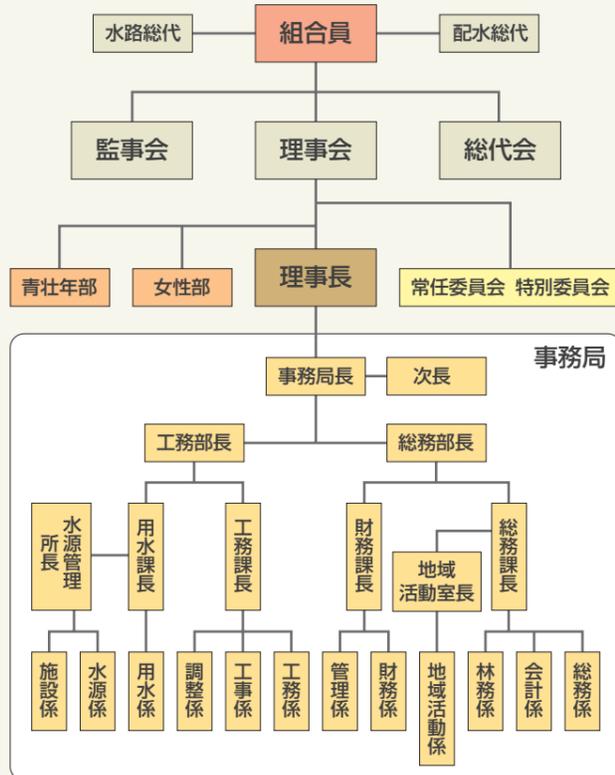
地区名	幹線水路 延長(m)	小幹流水路		水路 総延長(m)	左のうち 管水路延長(m)	概要
		本数(線)	延長(m)			
明治本流	11,534.0 0.0	29 8	48,940.7 8,358.1	60,474.7 8,358.1	53,519.5 702.1	工業用水と共用
東井筋	11,421.0 0.0	24 2	47,453.9 5,403.0	58,874.9 5,403.0	51,377.1 1,120.0	一部工業用水と共用
中井筋	8,420.7 8,848.0	44 15	64,519.0 21,975.0	72,939.7 30,823.0	64,417.7 840.0	
西井筋	14,349.0 0.0	2 28	34,749.4 4,947.7	49,098.4 4,947.7	39,645.9 717.0	
鹿乗井筋	14,126.0 17,461.0	32 39	34,621.2 36,053.0	48,747.2 53,514.0	14,494.2 510.0	
小計	59,850.7 26,309.0	131 92	230,284.2 76,736.8	290,134.9 103,045.8	223,454.4 3,889.1	上段 用水路 下段 用排水路
合計	86,159.7	223	307,021.0	393,180.7	227,343.5	

■受益面積の推移(明治21年~平成21年)



明治用水会館

■維持管理の状況：管理組織図



明治用水頭首工概要

■かんがい地域

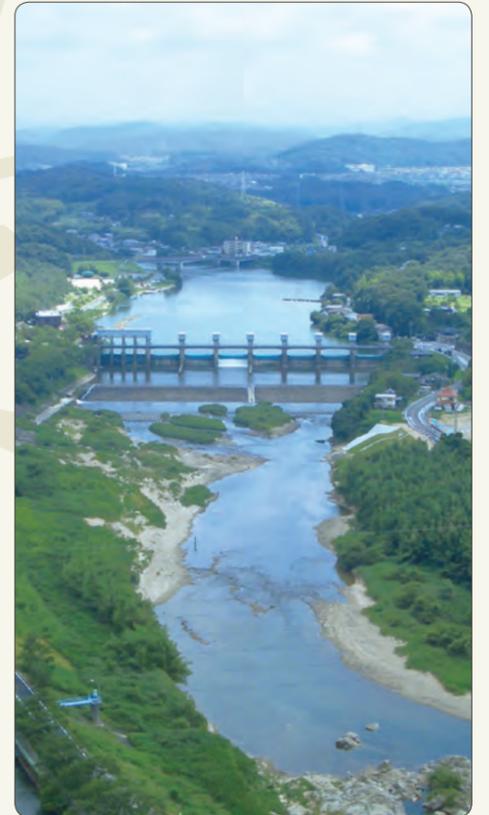
明治地域 安城市、岡崎市、豊田市、知立市、刈谷市、高浜市、碧南市、西尾市  
南部及び第二地域 幸田町、吉良町、幡豆町、一色町 合計8市4町

■施設の概要

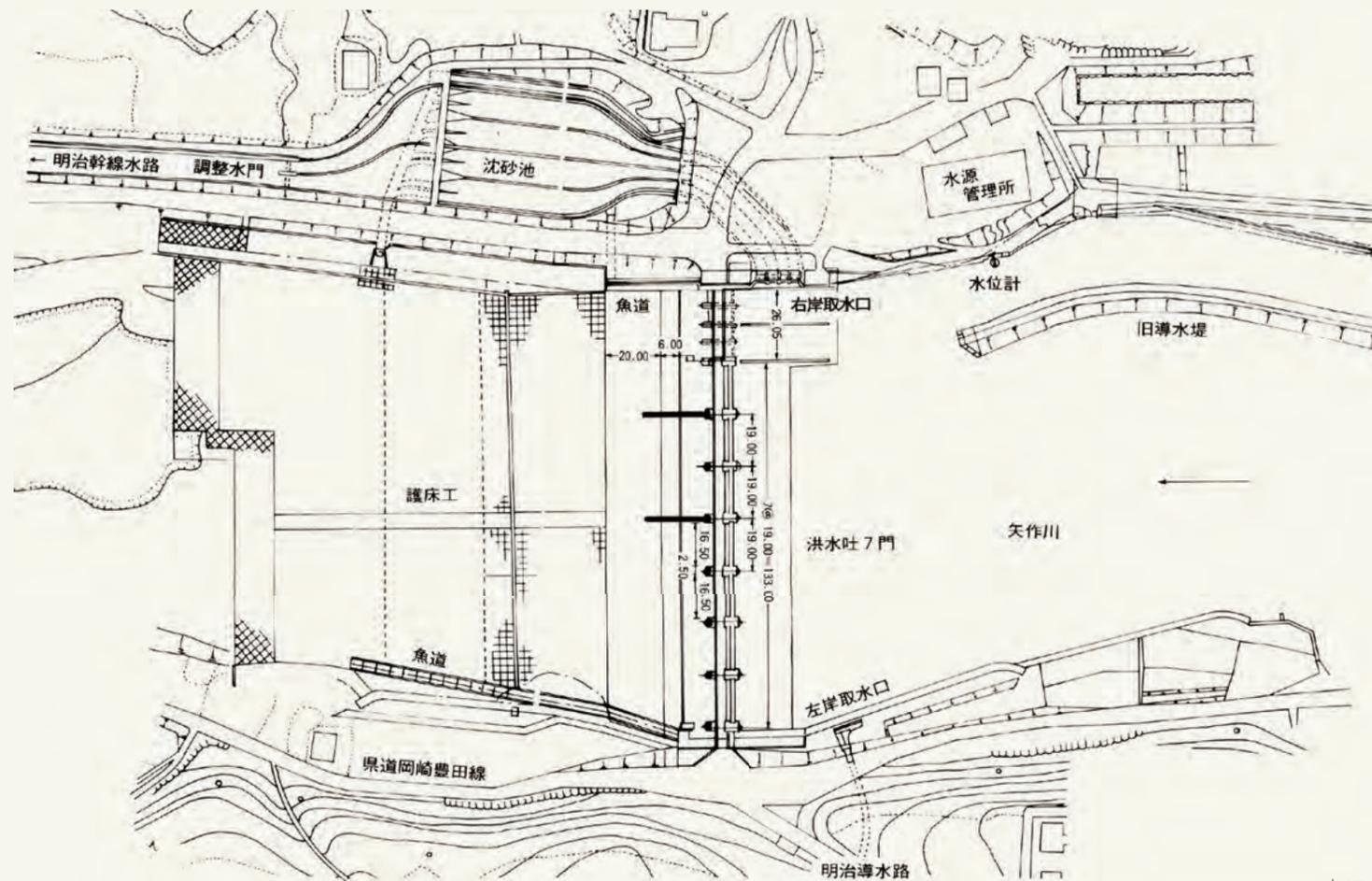
型式	フローティングタイプ
堤長	L = 167.30m
洪水吐	経間 16.50m × 扉高 2.80m × 7門 (ローラーゲート) L = 133.00m エプロン長 35.50m、護床工長 99.2m (異形ブロック)
土砂吐	経間 5.00m × 扉高 5.30m × 4門 (ローラーゲート) L = 26.05m エプロン長 35.50m、護床工長 125.0m (異形ブロック)
その他	(魚道他) L = 8.25m
堰上高	(取水位) EL. 30.10m

付帯施設：取水工

右岸	経間 3.10m × 扉高 2.10m × 4門 (スルースゲート)
左岸	経間 1.50m × 扉高 2.16m × 1門 (スルースゲート) 経間 2.00m × 扉高 2.16m × 1門 (スルースゲート)
魚道	右岸 階段式 巾 2.0m 1か所 左岸 階段式 巾 3.0m 1か所
沈砂地	巾員 10.00m × 4連 L = 50.0m 沈砂容量 740m³
管理橋	巾員 3.60m 橋長 L = 170.0m
操作制御施設	機側及び遠方操作
予備ゲート	洪水吐 経間 18.0m × 扉高 2.8m × 1門 (鋼製フローティングゲート) 土砂吐 経間 5.0m × 扉高 5.3m × 1門 (鋼製角落ゲート)



■平面図



関連資料

【 明治用水：年表 】

江戸時代

- 1808 文化 5 都築弥厚が用水開削計画を始める(説)
- 1826 文政 9 明治用水開削計画の測量が完成
- 1833 天保 4 都築弥厚病死 69才
- 1862 文久 2 伊豫田与八郎を中心に7カ村排水路開削計画が進展
- 1868 明治 元 岡本兵松 京都民政局に水路計画願書を提出
- 1872 明治 5 7カ村(代表伊豫田)が額田県に悪水路計画を出願 岡本額田県に水路計画出願
- 1874 明治 7 伊豫田7カ村悪水路計画断念し岡本の計画と統合
- 1879 明治12 本流の開削工事開始、碧海郡大浜茶屋村(上倉池)まで水路開削、東井筋の測量完了、中井筋の測量完了
- 1880 明治13 中井筋・東井筋の開削工事開始 新用水路盛業式を水源付近で挙行 中井筋・東井筋開削完成(初通水)
- 1881 明治14 西井筋完成 新水路の名称を「明治用水」と命名 用水管理組織として「井組総代」を選任
- 1882 明治15 明治用水連合水利士会設立
- 1884 明治17 花の木用水関係各村、添川用水開削を出願、翌月許可 東井筋矢作川を越えて 幡豆郡上町(西尾市)まで延長(現西城用水)水源取水口に船道開門完成

明治時代

- 1885 明治18 明治川神社創建
- 1895 明治28 明治用水第一樋門(木製)改築工事開始 伊豫田与八郎死去74才
- 1896 明治29 明治用水第二・第三樋門(人造石)で拡張工事施工
- 1897 明治30 明治用水普通水利組合成立
- 1901 明治34 旧堰堤設置工事開始 安城農林学校設立 初代校長 山崎延吉
- 1905 明治38 山崎延吉 県立農事試験場の場長を兼ねる
- 1906 明治39 安城町農会設立 組合会で造林事業実施決議
- 1908 明治41 組合造林規定制定 旧頭首工船道開門完成 下山村羽布造林地90か年の地上権設定契約(100ha) 明治用水普通水利組合に組織変更
- 1909 明治42 頭首工の第1樋門を人造石で改築
- 1912 明治45 羽布造林地の植林終了

大正時代

- 1914 大正 3 長野県根羽村の山林買収契約(564ha) 20,000円
- 1915 大正 4 根羽造林地の植林開始 水源頭首工補強工事(~大正6)
- 1924 大正13 この頃、碧海郡一帯が日本デンマークと呼ばれるようになった
- 1926 大正15 枝下用水普通水利組合を合併 東加茂郡旭村小渡の山林を購入(1.0ha) 7,500円
- 1930 昭和 5 東加茂郡旭村有間の山林を購入(1.7ha) 5,500円
- 1932 昭和 7 県営明治用水幹線改良事業着手(~昭和17年)
- 1942 昭和17 県営明治用水幹線改良事業を農地開発営団に引き継ぐ
- 1946 昭和21 矢作川上流御料林8,100余haの払下の出願
- 1947 昭和22 明治本流・枝下井筋改良工事完工式 農地開発営団閉鎖、幹線改良事業は農林省へ移る
- 1950 昭和25 新頭首工建設工事着手
- 1951 昭和26 新頭首工工事起工式挙行
- 1952 昭和27 明治用水土地改良区に組織変更 国営矢作川農業水利事業(羽布ダム)着手
- 1958 昭和33 新頭首工完成

昭和時代

- 1960 昭和35 東加茂郡旭町小渡の山林を水源かん養林として購入(0.1ha) 17万円
- 1963 昭和38 羽布ダム(下山村)完成 根羽造林地、伊勢湾台風被災地の植林完了 羽布造林地伐採跡地の植林完了
- 1968 昭和43 根羽造林地の県営林道外山線が完成
- 1969 昭和44 国営事業による幹線水路の管水路化を陳情 水質試験室を設置 矢作川沿岸水質保全対策協議会発足
- 1970 昭和45 県営水質障害対策事業追田地区着手(昭和53年完了)
- 1971 昭和46 根羽造林地、水源かん養林保安の指定を受ける 矢作ダム完成 国営矢作川総合農業水利事業明治用水地区工事開始(平成元年完了)
- 1972 昭和47 鹿乗川沿岸用排水土地改良区合併(8月)
- 1974 昭和49 明治本流と東井筋の上部を自転車道とすることに決定 明治本流、柳原用水等ハイラインかんがい始まる
- 1975 昭和50 県営西三河工業用水が明治用水を共用して通水開始
- 1978 昭和53 国営造成土地改良施設整備事業により頭首工改修着手(昭和59年完了)
- 1980 昭和55 根羽造林事務所新築竣工
- 1981 昭和56 国営事業で造成された水源管理所の使用始める

平成時代

- 1984 昭和59 東加茂郡旭町小渡の山林を水源かん養林として購入(1ha) 270万円
- 1987 昭和62 長野県下伊那郡平谷村でかん養林として山林取得(36ha) 3,440万円
- 1989 平成 元 国営矢作川総合農業水利事業完了(昭和45年着手)
- 1990 平成 2 平谷造林地水源かん養保安林に指定
- 1997 平成 9 明治用水緑道と水利用協議会発足
- 2005 平成17 「水のかんきょう学校」を開校し農業・農村の多面的機能や水土里ネット明治用水が地域へ果たす役割などを啓発
- 2008 平成20 水源と農業(用水)の係わりについて啓発する「農業用水水源地域保全対策事業」実施(H20-H24)
- 2010 平成22 「明治用水」通水130周年記念式典挙行 大池公園(都市公園)内に「水のかんきょう学習館」建設
- 2011 平成23 「水のかんきょう学習館」供用開始

そ づ う せ ん り り た く ぼ ん せ い  
疏通千里・利澤萬世

Meiji-Yousui Rural Resources for Future Generations

— 生命を育む明治用水

企画制作：明治用水土地改良区

編集・デザイン：(株)オルタナティブコミュニケーションズ



明治用水土地改良区

〒446-0065 愛知県安城市大東町22番16号

- 総務課 TEL 0566-76-6241
- 地域活動室 TEL 0566-76-4922
- 財務課 TEL 0566-76-4920
- 工務課 TEL 0566-76-4921
- 用水課 TEL 0566-76-4923
- FAX(共通) 0566-75-7944

明治用水水源管理所

〒471-0822 愛知県豊田市水源町6丁目10番地  
TEL 0565-28-0466 FAX 0565-27-0946

根羽造林事務所

〒509-7503 長野県下伊那郡根羽村5072番地3  
TEL 0573-47-2351

ホームページ <http://midorinet-meiji.jp/>  
Eメール [meiji@midorinet-meiji.jp](mailto:meiji@midorinet-meiji.jp)